

広島県の産業と川舟

広島は美しい太田川のほとり、水面を見つめて、時の流れを感じてみませんか？

原爆ドーム前にもある護岸の石段を「雁木（がんぎ）」といい、太田川上流から川舟で運ばれた物資の荷降ろしをしていた場所です。

上流域の加計は「出荷」の起点として「市」が開かれ、中流域の可部は石州街道の宿場町で「鋳物」が発達しました。

広島に原爆が投下された理由として「産業」の集積があり、その源流を見つめると、古くから西中国山地で盛んだった「たたら製鉄」につながります。

「砂鉄の山越えルート」「鉄素材の川舟ルート」「広島から大坂への海船ルート」が、江戸時代には確立されており、広島城下では「鉄の道具（安芸十利）」が発展しました。

太田川上流から運ばれた「たたら製鉄」は、近代化の課程で「木炭鋳鉄」に進化し、ダムによる水力発電や、八幡製鉄との提携があり、日本の産業を支えていたのです。



広島県立加計高等学校の改革

安芸太田町（加計）は、中国地方で人口減少&高齢化率がワーストな地域です。高校は定員割れで「廃校」が確実な状況でしたが、ある校長先生の就任を期に、過疎を逆手にとった学校運営への挑戦が始まりました。

登校拒否、ひきこもり、少年院退所など、どのような環境の生徒でも受入れることをスローガンに入学募集したところ、個人の学力の差が大き過ぎて、画一的な「中間期末試験」が機能しない状況・・・

そこで、各自の学力に合わせた「小さな模試」を日常的に繰り返すことで、教員の手厚いサポートが得られ、それが「小規模校」の強みとなっていった。

自ら考え、企画し、実践し、結果をプレゼンする「探求学習」のフィールドが人情溢れる田舎だったのも良かった点です。

やがて、進学校ではないのに「高い学力」が身につく「進学率」も上昇し、公設の学生寮が整備されているので、県外や海外からの入学希望者が増え続け、入学倍率4倍の人気校になっています。

教育系のコンサル、民間の塾講師が、サポートしているのも特徴的なところ。

変革期であった2019年に「たたら紙芝居」の活用を提案したところ、生徒の自主的な動きで、寸劇、ペープサート、フィールドワークへと進展し、アーチリング聖地化のアイディアは、この時に生まれました。

この年に、改革的、ワンマン的だった校長先生が、急速に亡くなりましたが、学校運営の理念は引き継がれ、過疎地の「教育改革」の成功例として高い評価を得ています。

